

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

Ama Divers as Spectacle: Function of the “Ama Pavilion” at Expositions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小暮, 修三 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/2286

[論文]

見世物としての海女——博覧会における「海女館」の機能

小暮修三

(Accepted November 30, 2021)

Ama Divers as Spectacle: Function of the “Ama Pavilion” at Expositions

Shuzo KOGURE *

Abstract: During the Taisho and Showa pre-war periods, “*Ama* demonstrations” were held as entertainment at domestic expositions, and they were very popular. As far as I can confirm, there were 41 cases of “*Ama* demonstrations” held at expositions between 1920 and the early 1940s. Then, what kind of attention were such *Ama* divers exposed to, and how were they consumed? And why were they so popular with the public? This paper examines the process of the formation of the sexual gaze toward the *Ama* divers through meanings of the expositions, statuses of the *Ama* pavilions, and discourses of the newspaper media --- especially the local newspapers of the expositions’ host cities.

At the *Ama* pavilions in domestic expositions, the sexual gaze of the public toward the *Ama* divers was formed through the intertwining of the interests of the organizers, the event vendors, and the newspaper media, all of whom wanted to attract visitors to the expositions. At the expos, the *Ama* divers were commercialized with adjectives such as “strange” and “erotic.” This represents the process of constructing an asymmetrical relationship in which the masses are placed in an overwhelmingly dominant position, and the *Ama* divers are displayed as the “other.”

Key words: *Ama* Divers, Spectacle, Exposition, Media, Representation

はじめに

鳥羽・志摩の海女漁技術が、素潜りという古態を留めた伝統的漁撈として、2017年、国の重要無形民俗文化財に指定され、2019年には、伝統文化を通じた地域活性化のための「日本遺産」にも認定された。更に、この海女漁の技術は、ユネスコ無形文化遺産への登録も目指されている。この一連の流れには、海女の高齢化・後継者不足や漁獲資源の減少を受けて、海女漁の振興と海女文化の継承保存活動を第一義としながらも、「海女文化」を観光資源とする地域活性化が企図されている¹⁾。

これまでも、観光商品化された「観光海女」やヌード撮影の被写体となった「モデル海女」については、都市居住者による「海女に向けられた性的視線」への批判的観点から僅かながらも論じられてはいる²⁾。しかしながら、この性的視線の形成過程、すなわち、海女を実際に見たこともない大衆に対して、海女がどのように性的に商品化・見世物化されていったのか、その過程についての詳細な論考は見当たらない。そして、その海女の見世物化には、大正・

昭和戦前期に開催された博覧会関係者——主催者、企画・演出・建設等を行う専門業者（ランカイ屋）、そして企画・宣伝を行う新聞メディア——の利害一致が大きな影響を及ぼしていたものと考えられる。

同時期の国内博覧会では³⁾、その余興として「海女の実演」が行われ、とりわけ人気を博したという。管見の限り、1920（大正9）年から1940年代初頭（昭和16年）までの間に、水族館や特設館、野外等で行われた「海女の実演」が41件確認されている⁴⁾。特に、1930年代（昭和戦前期）に開催された博覧会の多くでは、龍宮城を模した建物の内部にガラス張りの大水槽が設置され、そこで「海女の実演」を行う「海女実演館」あるいは「海女館」（以下、海女館で統一）が特設されていた。この海女館は、都市部盛り場の見世物から始まり、博覧会での興行として独自の発展を見せ、昭和戦前期に「見世物としての海女」が確立されたと言えよう。

そもそも、国内外の博覧会については、そのもの自体の政治的な機能⁵⁾、地方都市における機能⁶⁾、そして、植民地主義的な視線に基づく異文化機能など⁷⁾、様々な角度から考察が行われてきた。その中でも特に、博覧会の権力性

* Department of Marine Policy and Culture, Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT), 4-5-7 Konan, Minato, Tokyo 108-8477, Japan（東京海洋大学学術研究院海洋政策文化学部門）

に焦点を合わせた吉見俊哉によれば、博覧会とは、「帝国主義のプロパガンダ装置であると同時に、消費者を誘惑してやまない商品世界の広告装置」だという⁸⁾。そして、吉見は、19世紀末から20世紀初頭の各種博覧会（欧米の万国博覧会及び日本の国内博覧会）を横糸に、帝国・商品・見世物という三つの主題を縦糸に、博覧会がどのように大衆の感覚や欲望を動員・再編していったのかを明らかにしている。

日本の国内博覧会が開催された当初、博覧会とは、文明開化と殖産興業のための催しとして位置づけられ、見世物性や娯楽性が極力排除されていた。しかしながら、20世紀以降は、むしろ積極的に見世物的要素を博覧会に取り入れていく動きが現れ、1920年代（大正・昭和初期）には、その傾向が顕著となり、博覧会は大衆娯楽に変貌していったのである⁹⁾。このような博覧会の大衆娯楽化は、結果として、博覧会への集客装置としての娯楽施設の導入に顕著に現れてくる。すなわち、國雄行が指摘しているように、「より多くの人々を会場内に誘引するために、博覧会本来の趣旨とは異なっている、遊戯施設を設置するようになった」のである¹⁰⁾。

このような娯楽施設には、子供の国（飛行塔やメリーゴーランド等）や動物園、サーカスやお化け屋敷、演劇館、そして海女館などの余興特設館が挙げられる。後述するが、これら娯楽施設は、博覧会の各種施設の中でも入場者数も多く、福引やスタンプラリー等のイベントと共に、博覧会への集客装置として上手く機能することになる。しかも、これら娯楽施設や各種イベントは、新聞紙面で大々的に宣伝され、その機能を増幅させるのである。ただし、博覧会におけるこれら娯楽施設の役割について詳述した論考は、管見の限り、個別の見世物という観点から考察したものを除いて見当たらない¹¹⁾。

特に、海女館に関しては、博覧会で相当の人気を博したにも関わらず、特設余興館のひとつとして軽く触れられている数本の論文を除けば、志摩地方の「観光海女」について考察した塚本明の論考の一部に記載されているのみである¹²⁾。もっとも、塚本の海女館についての言及は、部分的な考察に留められ、事実誤認も少なからず存在しており、昭和戦前期の国内博覧会における海女館の位置づけ、並びに、大衆による海女への視線について、必ずしも適切に捉えたものとは言えない。

かつて、民俗学者の宮本常一は、1950年代の「モデル海女」を指して、「人の働く姿が、観光対象になるようになったということは、その職業の衰亡を物語る以外に何ものもない」と憂いていた¹³⁾。海女館については、宮本の指摘以前から、海女の働く（あるいは、それを模した）姿が、大衆の見世物として、好奇・好色の視線に晒されていたのである。現実の海女を見たことのない大衆にとって、海女館の「海女」こそが、現実の「海女」となる。海女館は、観られる者の「生活的な現実」と、観る者の「印象的な現

実」との間に亀裂を生じさせ、更には、時の経過とともに、そのような印象的な「現実」が、歴史的な「事実」を生じさせることにもなる。

それでは、大正・昭和戦前期に開催された博覧会の海女は、具体的に、どのような視線に晒され、どのように消費されていったのか？ そして、海女館は、なぜ、大衆の人気を博していたのか？

本稿では、時系列に沿って、博覧会の意味、そこにおける海女館の位置付け、並びに、それを宣伝する新聞メディア（特に、博覧会開催地の地方新聞）の言説を通して、海女に対する性的視線の形成過程について考察を行っていくこととする。

第一章 海女の見世物——海女館前史

1. 海女の鯉掴み

国内博覧会において初めて「海女の実演」が行われたのは、管見の限り、1920（大正9）年に京都岡崎公園で開催された「全国勸業博覧会」（主催：京都博覧協会・京都美術協会）である¹⁴⁾。同博覧会では、会期の途中から鳥羽の海女数名が招かれ¹⁵⁾、公園の中庭噴水池で「京都人には物珍しい海女の鯉掴み等」が演じられ、その結果、「著しく山國の士女の心をそゝつた物か十六日以来は日々一萬以上の入場者があつた」という¹⁶⁾。この「海女の鯉掴み」とは、少なくとも明治期、大阪千日前などの盛り場で行われていた見世物と同様のものであろう（Fig. 1）。



Fig. 1: 海土鯉ツカミ（明治初期の墨摺引札）¹⁷⁾

例えば、1897（明治30）年正月の新聞紙面には、大阪千日前の見世物の一つとして「伊勢産れの蜷女の鯉掴み」が挙げられている¹⁸⁾。また、1901（明治34）年正月の千日前の見世物でも、「海女の水芸」が江川太夫一座や松本水芸一座によって演じられている¹⁹⁾。それらの様子について、大正から昭和初期に活躍した洋画家の小出檜重が、以下のようなことを覚えていた。

千日前をあるいて海女の手踊の看板を見た、髪をふり乱して、赤い腰巻をした海女の一団がベックリンの人魚の戯れの絵の如く波に戯れているのである、それが頗る下品な、絵であったが、しかし遊心だけは妙に誘う処の絵であった²⁰⁾。

小出が思い切って木戸銭を払って小屋に入って見たものは、見物客が銭湯位の浴槽に一銭硬貨を投げ入れ、それを海女が巧みに拾うというものであったという (Fig. 2)。このような海女の見世物は、同じ頃、東京の盛り場である浅草でも行われている。浅草公園の「海底旅行」という見世物小屋では、「妙齢の海人が水中に浮き沈みつ魚貝を捕獲する」実況も行われたらしい²¹⁾。



Fig. 2: 海女の手踊 (小出権重)²²⁾

2. ガラス張り大水槽の登場

その後の海女館に続くようなガラス張りの大水槽で「海女の実演」が行われた初発は、1922 (大正 11) 年に東京上野公園で開催された「平和記念東京博覧会」(主催: 東京府) である。同博覧会は、東京府が第一次世界大戦後の世界平和到来を記念した博覧会で、文化国家「日本」をアピールするために開催され、その第一会場には日本初の住宅展示場 (モデルハウス展示場) である文化村が設けられた。なお、これを契機に「文化住宅」という言葉も生まれ、住宅が借りるものから所有するもの、つまり住宅の商品化が本格的に始まることになる²³⁾。

しかしながら、当時のグラフ誌『歴史写真』によれば、3月10日から開催された同博覧会も、当初予定していた観客者数が見込めなかったため、「人気の振興、入場者の吸集といふことに頭を痛め」たという²⁴⁾。そこから、この文化村に遊泳場としてガラス張りの大水槽 (Fig. 3) を建設し、6月17日に「志州鳥羽より本場の海女六名を呼寄せ電気應用の大仕掛で一日三回水底の眞珠採り実況を試み客を呼ぶこととなつた」²⁵⁾。しかも見学は無料だったらしい。いわば、販売目的のモデルハウス展示会における客寄せの無

料アトラクションとして、「海女の実演」が行われたのである。



Fig. 3: 水槽に於ける海女²⁶⁾

更に、その開演直後の6月20日には、大正天皇の第四皇子 (昭和天皇の末弟) である澄宮 (三笠宮崇仁親王) も「海女の水藝」を見学している²⁷⁾。その写真 (Fig. 4) が新聞紙面を飾ったことも相まって、7月末の閉会までに延べ1千100万人の観客者数を迎え、大盛況のうちに幕を閉じることになる。



Fig. 4: 海女の水藝を御覧の澄宮殿下²⁸⁾

このガラス張りの大水槽、むしろガラス張りのプールは、側面にコンクリート6尺 (1.8 m)、その上部に4尺 (1.2 m) の鉄骨を組み立てて厚さ6分 (約1.8 cm) のガラス板をはめ込み、水深9尺 (2.7 m) にして、水槽内部をすべてモルタル塗、「水底ニハ岩ヲ配シ、緋鯉其他ヲ放養」したものであったという²⁹⁾。この大水槽によって、明治期の見世物とは異なり、Fig.3 左下の枠内写真のように、「海女の実演」を側面から見物できるようになったのである。また、同写真からもわかるように、この海女たちは白色ではない (おそらく赤色の) 腰巻を身に着けており、実際の磯着とは異なる見世物仕様の出で立ちで「実演」を行ったようである。

そもそも、明治政府は、文明開化と殖産興業のための催しである博覧会から見世物性や娯楽性を極力排除する方針を採っていたが、20世紀以降は、むしろ積極的に見世物の要素を博覧会に取り入れていく動きが現れた。その契機は、1903（明治36）年に大阪天王寺今宮で開催された「第五回内国勸業博覧会」（主催：明治政府）であり、同会場には数多くの余興施設（動物園やウォーターシュート等）が設けられ、博覧会に対する大衆の興味が掻き立てられたという³⁰⁾。

1895（明治28）年に開催された「第四回内国勸業博覧会」（主催：明治政府）までの入場者の増加率は、その回を追うごとに減少し続けて頭打ち状態に近づいていた。そして、これを打開したのが各種余興であった。事実、第五回内国博で「最も入場者を集めたのは動物園で、続いて不思議館、ウォーターシュート、大林高塔、浪速踊り、メリーゴーランドで、この余興だけで一四〇万人も集め、第四回内国博の入場者数一三万人を超えてしまった」という³¹⁾。この第五回内国博で顕在化した博覧会の見世物化・娯楽化傾向は、その後も強化され続け、平和記念東京博覧会に至っては、「見世物気分いっぱいの大衆娯楽へと大きく変容していた」のである³²⁾。

つまり、この段階での博覧会における「海女の実演」は、少なくとも明治期から続く見世物と変わらぬ興行として位置づけられ、しかも、その見世物が大衆の好評を博していたこともうかがえる。ただし、大衆が何を求めて海女の「実演」を見学していたかは、この段階では定かではない。

3. 「海女館」の登場

大正期の博覧会は、生産振興策から消費奨励策へと方向転換し、更には地域振興策としての役割が期待されるようになっていく。そして、平和記念東京博覧会の3年後、1925（大正14）年に満州の大連で開催された「市制十周年記念大連勸業博覧会」（主催：大連市）において、初めて「海女館」という名称の余興が現れる³³⁾。同博覧会は、「日華両国産業貿易の改良発達に資する」ことを目的に³⁴⁾、大連市が主催し、関東庁と南満州鉄道が支援を行った大連初・植民地初の勸業博覧会であった。ここでも「見学者の欲望をかきたてる仕掛けには娯楽性が求められ、珍奇な出し物の興業が巾を利かすという形態をとって」おり³⁵⁾、海女館という「キッチュな見世物」も登場する³⁶⁾。

この海女館は、「東京で開催された平和博覧会では皇族殿下方の御台覧を得た榮光の催し物」であり、「場内に三百噸からの大水槽を造つて六人の裸體となつてゐる海女が宛然海中を自由に潜つて眞珠貝を採取する」余興として地元新聞では紹介されている³⁷⁾。この紹介文から、同博覧会の海女館とは、先に触れた平和記念東京博覧会と同じようなガラス張りの（あるいは、ただの）プールで「海女の実演」を行ったものだと考えられる。そして、同博覧会の会

場一角には、「真珠採取を実演する海女館及八幡の藪知らずの迷路を始め飲食店販売店数多く、頗る賑つて」いたという³⁸⁾。また、海女館の「鮑デー」と称して、会場の南近郊である黒石礁海岸においても、「海女が鮑を採ると即席の料理として参加者に辨當と共に頒つ」有料イベントが行われたらしい³⁹⁾。なお、この海女館は、同博覧会で興業物許可を受けた13件の内の一つで、興行主は長谷川良之助という人物である⁴⁰⁾。

同博覧会以降、元号も昭和に改まり、各種博覧会におけるガラス張りの大水槽での「海女の実演」や「海女館」という名称も常態化していくことになる。そして、海女の実演や海女館には、その企画、現場工事、そして見世物を運営するランカイ屋（博覧会の企画・演出・建設等を行う専門業者）や、それを企画あるいは後援・宣伝する新聞社が密接に関わってくることになる。

第二章 新聞社とランカイ屋——メディア・イベントの登場（1928-1930年）

1. ランカイ屋中の惑星L

昭和期に入ってから、1928（昭和3）年に宮城県塩釜で開催された「海の博覧会」（主催：宮城県塩釜町）において、海底館での「海女の実演」が行われ、当時の地元新聞の前宣伝では、以下のように報じられている。

港灣海事水□等の實物模型参考品を陳列して觀覽に供する海底館は海の博覽會中での呼物で神祕とされてゐる海底の模様を眼前に現はし魚族の棲息狀況を實際に見せ館内は電氣照明を以て海底を潛行するの思ひをあらしめ海女の眞珠採取の實演も見せる⁴¹⁾。

しかし、同博覧会が開催されて一週間たった後も、「第二會場の花海底館はいまだ呼び物の『海女實演』タンク修理中のため入場お断り」だったという⁴²⁾。そして、この不首尾にはランカイ屋が大きく関わっていた。

ランカイ屋の一人であった中村童二は、海女館の成り立ちに触れ、「はじめこれを考案したのは、ランカイ屋中の惑星といわれたL」であり、「はじめて海女館を考えたのは、昭和初期に開かれた、塩釜での博覧会だった」と語っている⁴³⁾。このLは中村の先輩と相談して、海軍の艦艇に使われている厚さ1インチ（約2.5cm）、縦2.5mの特殊ガラスを鉄枠で継ぎ合わせ、光明丹という赤い顔料を油で練ってパテにしたという。これは、前出の平和記念東京博覧会の大水槽よりもガラスが厚く、観客が見ることのできるガラス面も倍以上に大きい設計になっている。

しかし、「水槽のできる部分には、コンクリートで基礎を打ったが、完成して水を入れると、思いがけないことになった」という⁴⁴⁾。というのも、二人の考えた一番の難点

はガラスの水圧耐性であったが、「ガラスの面についてのみ注意していて、コンクリートの基礎にはあまり注意を払わなかった。地盤が砂地で柔らかかったため、大水槽の底がぬけてしまった」という⁴⁵⁾。そのため、『海女実演』タンク」を修理しなければならなかった。なお、この「タンク」が完成したか否かについては、不明のままである。

このようなランカイ屋の試行錯誤の末に、後に見るような海女館の大水槽が形作られていくことになる。なお、このLは、この2年後の1930（昭和5）年、三重県宇治山田で開催された「御遷宮奉祝神都博覧会」（主催：宇治山田市）の第二会場の位置づけで開かれた「二見ヶ浦臨海博覧会」（主催：度会郡二見町）にも中心的人物として登場することになる。

2. 正力松太郎とランカイ屋の乃村泰資

「海の博覧会」閉会の約1か月後、1928（昭和3）年7月に東京上野池之端で開催された「御慶事記念婦人子供博覧会」（主催：家庭文化協会）でも、ガラス張りの水槽での「海女の実演」が行われている。同博覧会の詳細は不明だが、新聞紙上で「帝都一の大納涼園」や「五十坪の大プール浦島遊び」、「ホントの雪が降る北極館」といった宣伝文句（Fig. 5）が踊っているように、子供向けに催された見世物的・娯楽的傾向の強い博覧会（イベント）だったようである。そこには、「海女の潜水真珠採る 大海底館」があり、「横から覗く海女の泳ぎは實物だけに子供の喜びはまた一層であつた」という⁴⁶⁾。なお、この「大海底館」は、その絵葉書には「海底旅行館」とも記されており⁴⁷⁾、先に触れた「海底旅行」という浅草公園の見世物小屋を彷彿させるものでもある。



Fig. 5: 婦人子供博覧会（広告）⁴⁸⁾

大正末期から昭和初期にかけて見世物化・娯楽化してい

く博覧会は、同時にメディア・イベント化の傾向を強めていくことになる。このメディア・イベントとは、「新聞社や放送局など、企業としてのマス・メディアによって企画され、演出されていくイベント」を意味している⁴⁹⁾。1922（大正11）年の平和記念東京博覧会で顕在化したように、同時期の博覧会は、マスメディアを通して「近代的な消費生活のイメージを浸透させ、大衆娯楽を組織化していく装置」として、その機能を強化していくのである⁵⁰⁾。

それまでの新聞社にとって、博覧会等のイベントは、読者層の拡大を図る好機ではあったが、独自イベントを主催するだけの資本力を持ち合わせた新聞社は限られており、経営効率的な判断からも政府や地方自治体等の主催するイベントに便乗することが選ばれたという⁵¹⁾。しかしながら、大正末期から昭和初期にかけて最も成功したメディア・イベントが、讀賣新聞社、あるいは興行師・正力松太郎によって企画された一連のイベントであった。

その初イベントは、1924（大正13）年に東京の両国国技館で開催された「大納涼園」というイベントで⁵²⁾、讀賣新聞社が主催し、見世物屋（ランカイ屋）の乃村泰資（乃村工藝社の創始者）が企画・施設装飾に関わった⁵³⁾。この正力と乃村の両者の結びつきは、大衆娯楽を組織化していく上での大衆心理の掌握にあったという。正力の経営方針は、「一に二にも大衆の心理をつかむこと、そして大衆というものをよるこぼせること、そういう事業をどしどしおこなうこと」であり、従って「紙面と事業は両輪の如し」という信念であった⁵⁴⁾。

このような考えを共有した乃村は、正力と密接な関係を持ちながら各種イベント事業を続けていくことになる。讀賣新聞社は、1926（大正15）年夏には両国国技館で「樺太博覧会」を後援し、同27（昭和2）年には東京上野池之端で「民衆納涼博覧会」を主催。先に触れた同28（昭和3）年の御慶事記念婦人子供博覧会に関しても、東京府・東京市と共に後援することになる⁵⁵⁾。そして、乃村は、これ以後、昭和戦前期の日本各地で開催された博覧会において、海女館の館外・館内装飾を手掛けていくことにもなるのである。

3. ランカイ屋の試行錯誤

大正末期から昭和初期にかけての博覧会を含むメディア・イベントは、近代的な消費活動や娯楽を享受し得る中産階級層の拡大を前提としていた。同時期の大都市における博覧会の盛況は、都市部鉄道網の発達に伴う都市近郊の開発と密接なつながりを持っており⁵⁶⁾、従って、大都市と地方都市とでは、そのイベントの規模や内容において温度差や各種混乱も見られたようである。ガラス張りの大水槽という設備を必要とする「海女の実演」を巡っても、先に触れたような試行錯誤や混乱が続いていく。

1930（昭和5）年、先の御遷宮奉祝神都博覧会において、

第二会場的に位置づけられた二見ヶ浦臨海博覧会では、「海底に潜入して魚介を採捕する海女作業の実演」が企画されていた⁵⁷⁾。この臨海博覧会は当初、2か月間の開催予定であったが⁵⁸⁾、暴風雨の影響や不測の災害等から、1か月間の開催に変更されたという⁵⁹⁾。しかも、本館及び「海女の実演」を行う臨海博物館に関しては、工期の遅れから開場が後ろ倒しにずれ込んだという⁶⁰⁾。「これでは町の體面を汚すと町會で物議の種となり……、日本工藝會社が實權を握つてゐては到底資本が繼續せないので名實共に町營とすることに決定」し、早急に開館して会期を延長することになったらしい⁶¹⁾。

このような延期に次ぐ延期になりながらも、同博覧会では、結果として「開館以來演藝館の美人踊と共に毎日十數回づゝ貝類を採取する海女の実演を見せて入場者を喜ばせ」ることになったという⁶²⁾。そして、この混乱を生じさせた日本工藝會社の中核を担っていたのが、先に触れたランカイ屋Lであった。

1929（昭和4）年の伊勢神宮遷宮の後を受けて、全国からのお伊勢参り客を当て込んだ神都博覧会が開催されると聞くや、Lは伊勢の名所「二見ヶ浦に海女館を中心とした第二会場をつくらう」と考えたという⁶³⁾。Lは早速、東京の銀行から融資を取り付け、ランカイ屋仲間に会場見取り図や平面図を作らせ、地元二見町の町長を口説き落とし、臨海博覧会の開催決定までに漕ぎ着けた⁶⁴⁾。しかしながら、資金面で銀行と揉めたため、工事半ばで資金不足に陥り、Lが東京から連れて来た鳶や大工、ペンキ屋等の職人たちの工賃も滞り、「海女の実演」を行う臨海博物館の開館が延期に次ぐ延期の結果、主催者変更に至ったのである⁶⁵⁾。

同30（昭和5）年の秋には、兵庫中之島や湊川公園等で開催された「観艦式記念海港博覧会〔神戸海港博覧会〕」（主催：神戸博覧会協会）でも、湊川公園（第二会場）に水族館が設置され、「三重県より海女四人を三木市水産副会長の斡旋により招聘し真珠採取の潜水作業実演を行ひ、都会人士を喜ばすこと限りなかつた」という⁶⁶⁾。この湊川公園は「神戸市随一の盛り場新開地に隣合っているだけに余興にも随分面白いものがある、芸者の手踊り、海女の鮑取りなど艶ッぽい」と、新聞でも報じられている⁶⁷⁾。この「艶ッぽい」という宣伝文句については、「福原を隣地に擁する湊川新開地において女性による見世物的な要素を求められた世相が読みとれる」とも指摘され⁶⁸⁾、性的視線が色濃く反映されたものと言えよう。

また、新開地においては、同時期の衛生展覧会でも、ランカイ屋による「海女のアワビ取り」の興行が打たれていた⁶⁹⁾。この衛生展覧会への「乏しい入場者も、この水槽前だけは相当数の人を集めた」らしい⁷⁰⁾。この水槽のガラスは2m四方程度で、その中に「真ッ逆さまに赤い腰巻きをヒラヒラさせながら海女が潜って」いって水槽の底に敷かれた小石の中のアワビを拾い、「海女は遊泳しながらガラス面に顔を擦りよせ、手で何やら客をからかうかのような

仕草を織りこむ」見世物も行われたようである⁷¹⁾。そして、同時期以降、海女に対する好奇・好色の眼差しも、博覧会の客寄せとして、更に強調され始めていくことになる。

第三章 龍宮城と「エロ」の登場（1931-32年）

1. 水中のエロ、あるいは、裸體の水中レビュー

大正末期から昭和初期にかけて、地方都市では、地元への鉄道誘致や港湾施設の拡充を求める流れが動き出していった⁷²⁾。その流れには、地元への利益誘致が強く求められ、誘致による地域活性化への意図が込められていた。「小樽海港博覧会」（主催：小樽市・小樽商工会議所）もまた、商港小樽の進展に伴って港湾修築工事が完成したのを機に、国民海事思想の普及という名目の下、地元小樽の産業貿易振興を図ることを目的とし⁷³⁾、1931（昭和6）年7月に同海岸埋立地で開催された。そして、同博覧会でも「海女の実演」が行われている。

この実演に関しては、まだ計画段階にも関わらず、東京朝日新聞にイメージ・イラスト付き記事で、「水族館内に大水そうを設置し三方に一メートル四方の厚ガラスを張りつめ海女水中の妙技を見せウンと客を呼ぼうとの計畫を樹て道廳を通じて三重縣知事に二十〇前後の娘の海女周旋方を依頼した」と報じられている⁷⁴⁾。同博覧会の主催者が、「ウンと客を呼ぼう」と考え、「二十歳前後の娘」を呼んで「海女の実演」を計画したことがわかるだろう。

そして、実際に完成した「海女実演槽」（Fig. 6）は、およそ、幅10.8m、奥行き2.7m、高さ2.55mの容積に、厚さ2.5cm～3.8cm、1m平方のガラス2段組み計16枚をはめ込んで作られた。その後の海女館でも類を見ないほどの大水槽を作ったわけである。事実、「本場三重縣和具村から招いた妙齡の海女が水族館内に設けた間口六間のガラス張りの水槽内で人魚のやうに泳ぐ水槽の大きさは神戸海博や濱松博の三倍もあり觀客席は優に數百人を收容出来る正に日本一の海女槽」だったという⁷⁵⁾。

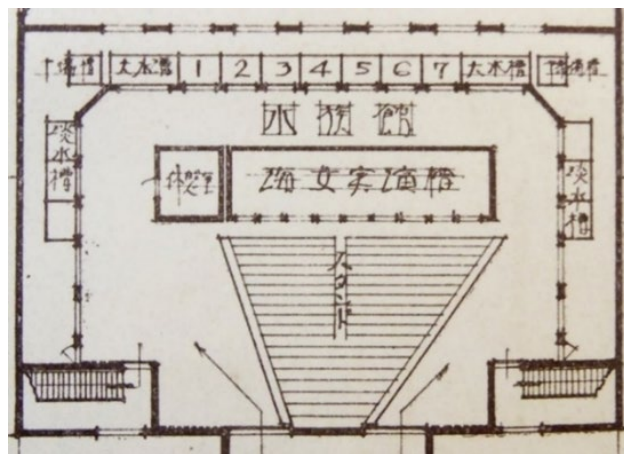


Fig. 6: 海女実演槽⁷⁶⁾

また、その大水槽で実演を行う海女たちに関しては、その雇い入れに苦心したらしく、「結局北海道廳の紹介により、三重縣廳の斡旋を請ひ、更に三重縣志摩水産學校長飯間本一氏等の援助により、志摩郡和具村漁業組合に人選方を委嘱し、交渉數次の後左記條件の下に、山本あさ外五名を雇ふことを得た」という⁷⁷⁾。そして、この「左記條件」の一つとして求められたのが、実際の磯着とはまったく異なる「桃色モスリン製海水浴着」の着用であった (Fig. 7)。



Fig. 7: 水族館内大水槽にて実演せる海女⁷⁸⁾

先の繰り返しになるが、同博覧会の主催者は「ウンと客を呼ぼう」と考えて「二十歳前後の娘」を呼び、しかも、肌襦袢とも見まがうような「桃色のモスリン製」の水着で「海女の実演」を計画したことがわかる。

ただし、この「海女の実演」に関しては、博覧会関係者たちによる事前の検閲があり、「特に警察官が立會つてウルトラエロにわたる部分はカットして見事パスした」らしい⁷⁹⁾。換言すれば、エロ過ぎると思われる演技の一部をやめさせた上で実演を許可したということであろう。しかし、新聞紙面では、「水中のエロ」という見出しの下、「妙齡の海女が人魚のやうに泳ぎ廻り水中にエロを發散して、觀覽者を喜ばせる」と報じられている⁸⁰⁾。「ウルトラエロ」とはいかないまでも、「エロ」は發散されたようである。結果、「一般觀衆の感興は、晝夜を通して此所に集中せられ觀客先を爭ふて毎回座席の占領に熱狂し、スタンドは常に立錫の餘地なき活況を呈した」という⁸¹⁾。

なお、小樽海港博覧会は、隣市の札幌でも同時期に「国産振興北海道拓殖博覧会」(主催：北海道庁・札幌市役所・札幌市商工会議所)が開かれたため、それらと提携して第三会場という位置づけがなされていた⁸²⁾。この拓殖博覧会でも、同協賛会主催の海底旅行水族館にガラス張りの大水槽が作られ、「裸體の水中レビューともいふべく拓殖白眉の呼物として多大の人氣を煽るべく期待され」、先に触れた「全國産業博の水族館で妙技を演じ非常な人氣を博した曲線美豊かな美人揃ひ」の海女が雇われたという⁸³⁾。

少なくとも、これら 1930 年代初頭の「海女の実演」以降、新聞紙面では「水中のエロ」や「裸體の水中レビュー」といった煽情的な見出しが躍り、これに続く博覧会では、より好色な眼差しに基づく惹句が博覧会への客寄せとして紙面を飾ることになるのである。

2. 龍宮城を模した海女館の登場

1932 (昭和 7) 年、満州国の建国宣言と時を同じくして、朝鮮総督府や南満州鉄道の後援を受け、朝鮮京城府で「新興満蒙博覧会」(主催：京城日報社・毎日申報社・セウル・プレス社)が開催された。同博覧会の主催・京城日報社が発行する朝鮮総督府の機関紙「京城日報」では、その開催前の段階から、海女館が同博覧会の「花形」として位置づけられ、その建設過程までもが写真入りで紙面に飾られている⁸⁴⁾。そして、博覧会開催の前日には、「恐らく會場唯一の特異な存在として、……人々を魅惑するであらう海女館は、外形は海低(ママ)の岩窟に象り正門は詩の龍宮を現はした凝った趣向、内部は硝子張りの水槽で妙齡の海女が満點たること請合である」とも宣伝されている⁸⁵⁾。

更に、同開催後の「京城日報」紙面では、「エロと涼味 満點の海女館」、「エロ・グロの海女館」、「エロ・グロの殿堂」(Fig. 8)といった好色的かつ煽情的な見出しが、連日のごとく、博覧会への客寄せ惹句として強調され続けていくのである⁸⁶⁾。

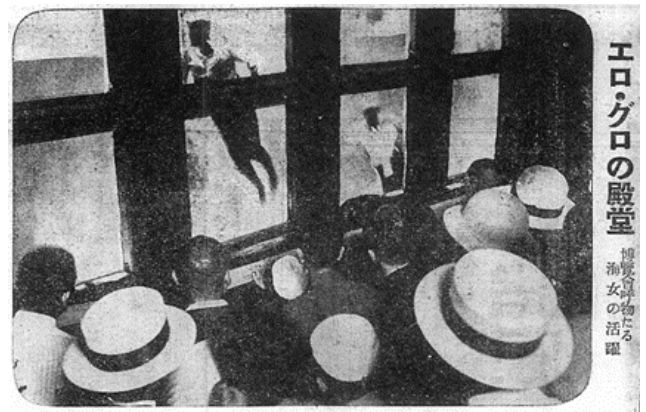


Fig. 8: エロ・グロの殿堂⁸⁷⁾

海女館の大水槽の中では、「五人の海女が裸身となつて眞珠の採取を行ふ、……海女が人魚の様に輕やかに赤青黄の光線に彩どられて水中を泳ぎ廻る光景は蒸し暑い眞夏に納涼氣分を満喫させる」という⁸⁸⁾。

もちろん、海女は、新聞紙面のように「裸身」にはなっていないが、そのような宣伝によってか、「龍宮海女館の蓋開け以來こゝはダン然若い人達で押すな押すなの繁盛ぶり、青い松原ドンと打つ波の白濱で鍛へあげたる見事な肉體……、舞臺の上では見られぬ柔いポーズの數々にすっかり魅せられて」いくのである⁸⁹⁾。

しかも、同博覧会の海女館は、管見の限り、写真で確認し得る最初の龍宮城を模した建物 (Fig. 9) であり、これ以降、龍宮城を模した建物内に設置されたガラス張りの大水槽の中で「海女の実演」が行われる海女館という施設は、日本全国の博覧会における余興館として定番化することになる。



Fig. 9: 新興満蒙博覧会 海女館⁹⁰⁾

なお、この新興満蒙博覧会の閉会直前の 1932 (昭和 7) 年 9 月、名古屋第 3 師団内で開催された「満蒙軍事博覧会」(主催: 新愛知新聞社) という国内のメディア・イベントでも、龍宮城を模した海女館が現れている。しかも、その海女館を設置したのが、正力松太郎と手を組んだランカイ屋・乃村泰資であった。同博覧会では、乃村の手によって、海女館のみならず、「ひとつの博覧会の全会場を一手に請負うはじめての『単独施行』」が行われたのである⁹¹⁾。

第四章 観光とエロ (1932-34 年)

1. 地方都市による「産業と観光」

昭和初期、地方都市での博覧会開催を強く駆動させた力は、全国規模での鉄道網の発達をもたらした変化であった。地方都市は、鉄道の開通によって大都市と近い関係に入り、文化の均質化が進んでいった。その一方で、中央との差異を求めて独自性を見出そうとする動きが生まれ、それが博覧会開催に結実したという⁹²⁾。地方都市での博覧会においては、大都市とは異なる魅力を伝えるため、郷土のイメージを発信する装置として郷土館が設置され、他方、他府県から人々を呼び込むため、郷土のイメージを高める手段として観光館が設置され、その両者が地方博覧会での定番となっていくのである⁹³⁾。

1932 (昭和 7) 年、金沢の出羽町練兵場や旧金沢城本丸跡地で開催された「産業と観光の大博覧会」(主催: 金沢市) は、まさにその嚆矢となるような博覧会であった。「観光」の名称を冠した博覧会は、それ以前にもあったが、観光館という建物が設置されたのは、同博覧会が初めてだっ

たという⁹⁴⁾。現在では当たり前のように、地方活性化の要として観光産業が位置づけられているが、昭和初期の金沢では、すでに博覧会開催をめぐる観光を産業として位置づける考えが唱えられていたのである⁹⁵⁾。そして、同博覧会においても、有料の特設館として海女館が設置されている。

同海女館は、「館内正面に……硝子張りの大水槽を設け、志摩の海女として情緒豊かな三重県に於ける赤い湯巻の海女の、海草、貝類、真珠採取等に於ける海底動作の実況を観覧せしめ」たという⁹⁶⁾。ただし、同博覧会に関する新聞紙面では、新興満蒙博覧会のように「エロ」の見出しが躍ってはいない。しかしながら、翌 33 (昭和 8) 年に宮崎市で開催された「祖国日向産業博覧会」(主催: 宮崎市・宮崎商工会議所) では、宮崎新聞社の後援を受け、神崎熊太郎という興行主の特設した海女館が⁹⁷⁾、開催前から「百パーセントのエロ情景を現出」するものとして新聞紙面で紹介され⁹⁸⁾、開会中には、「エロの殿堂海女館」という惹句や⁹⁹⁾、写真入りでの「エロ人魚」(Fig. 10) といった煽情的な見出しで宣伝されることになる。



Fig. 10: エロ人魚は踊る¹⁰⁰⁾

この祖国日向産業博覧会は、日豊本線の全線開通を通して産業や文化が向上し、宮崎市制 10 周年を迎えたことを記念に開催された宮崎県初の地方博覧会であった¹⁰¹⁾。この「祖国日向」とは、廃藩置県以前の宮崎県域の呼称であり、宮崎県の中心である宮崎市を指す。同市は、皇祖発祥の霊地として知られて史蹟も多かったが、交通の便が悪く、それを観光資源として有効に活用し得なかったという。しかしながら、日豊本線の全線開通以降、他県からの観光客を呼び込むだけの条件を満たし、博覧会の開催に至ったのである。そのような観光客を呼び込むための特設館の一つとして、「エロ」の強調された海女館が設置されたようである。

この海女館は、やはり龍宮城を模した建物で、その内部では「三重県の志摩の純朴な乙女らがハチ切れそうな豊満な肉体を赤の腰巻に包み」¹⁰²⁾、「従横自在に赤い腰巻を水中にひるがへし乍ら潜水泳ぐ有様は正に人魚そつくりでエロチック味を發揮し観衆をヤンヤと云はせ連日大入満

員の盛況を呈して」いたという¹⁰³⁾。実際、海女館の入場者数は、同博覧会中、日光館(94,386人)や有田洋行(65,912人)に続く第三位(51,789人)¹⁰⁴⁾。そして、「海女館の観客たちの興味は、真珠取りの再現ではなく、濡れて透ける美人海女たちの裸体にあった。海女館は、エロティックな展示で人気のパビリオンだった」のである¹⁰⁵⁾。

また、同博覧会の開催された1933(昭和8)年には、全く同時期に奈良市制35周年を記念した「観光産業博覧会」(主催:奈良市観光協会)も開催され、そこでも龍宮城を模した海女館が設置され、「三重縣の真珠採取の實演」が行われている¹⁰⁶⁾。加えて、同年同時期に、宮城県仙台西公園でも第二師団凱旋を記念した「満蒙軍事博覧会」(主催:河北新聞社・読売新聞社)というメディア・イベントが開催され、祖国日向産業博覧会と同様、「海女館のエロ」を売りにし¹⁰⁷⁾、「海女の実演」の様子が紙面を賑わしている¹⁰⁸⁾。しかも、海女館で実演している海女たちが自動車に乗って市内で宣伝ビラ(Fig. 11 参照)まで撒布したという¹⁰⁹⁾。なお、同博覧会もまた、前32(昭和7)年に開催された満蒙軍事博覧会と同様、乃村泰資による単独施行であった¹¹⁰⁾。



Fig. 11: 宣伝ポスター例¹¹¹⁾

更に、同33(昭和8)年、満州の大連で開催された「満洲大博覧会」(主催:大連市)にも、龍宮城を模した海女

館が、後にも登場するランカイ屋・福原久義という人物によって特設されている¹¹²⁾。

2. 観光と国防

地方都市における観光資源の産業化を主要なテーマとして据えた博覧会は、1934(昭和9)年になっても、引き続き開催されていく。「国際産業観光博覧会」(主催:長崎市)は、雲仙が瀬戸内と霧島とともに日本初の国立公園に選定されることを受け、観光都市としての発展を目的に、同年、長崎市と雲仙国立公園において開催された¹¹³⁾。

同博覧会で特設された龍宮城を模した海女館は、その開催時の新聞紙面で、「洞窟建ての館内に一大水槽を設け、美人海女数人が赤い腰巻もあやに魚介採取の實況を硝子越しに見せ様と言ふ多分にエロを狙ったもの」と宣伝紹介されている¹¹⁴⁾。同博覧会においても海女館は、「多分にエロを狙ったもの」であり、更には、「海の感覚的跳躍であり、そこはかとなき感能の匂ひは水中にむせ返つて、人々を暫し夢幻の境に引きずり込まずには置かない、蓋し場内唯一の大膽な感覚的世界である」とまで¹¹⁵⁾、好奇・好色の視線の下に晒されていたことがわかる。

また、同時期、岡山県では、岡山と倉敷で博覧会が開催されており、その両市でも「海女の実演」が行われている。1934(昭和9)年に岡山市東山公園で開催された「全国工芸博覧会」(主催:岡山市)では、「志摩の海女六名が淫刺たる肉體を躍らして真珠貝採取の實演を行つた」という¹¹⁶⁾。しかも、この「海女の実演」は、「赤い腰巻にエロ味を慎ましやかに發散しながら」行われたらしい¹¹⁷⁾。他方、倉敷市で開催された「国産振興家庭博覧会」(主催:倉敷市・倉敷商工会議所)では、主催者から開設を許可された興行物が海女館と動物園の二つだけであり、当時における海女館の大衆性が理解できるだろう。実際、「博覧会最終日の深更まで連日興行をつづけ雨天の日を除く外は常に大入満員の盛況を呈した」という¹¹⁸⁾。

更に、同34(昭和9)年には、これら観光資源の産業化をテーマとした地方都市博覧会のみならず、新聞社主催によるメディア・イベントにおいても海女館の興行が行われている。同年後半には、中国大陆への侵略を図る当時の時勢を反映するように、「国防」という言葉を冠に頂く博覧会が登場している。7月には、新潟市で「国防と教育博覧会」(主催:新潟毎日新聞社)、9月には、山形市で「国防と産業博覧会」(主催:国民新聞社)が開催された。

これらメディア・イベントは、両方とも乃村泰資による単独施行であり、後者の産業博覧会は、前者の特設館の多くを使い回したものだっらしい¹¹⁹⁾。山形市の博覧会では、第一会場である同市雁島公園に海女館が特設され、「三重縣の本場から五人の海女が来てガラス張りの大水槽に潜り真珠採りの實演」が行われた¹²⁰⁾。なお、これ以前にも海女館外観の絵葉書は販売されていたが、同博覧会では、

海女館内部までが絵葉書 (Fig. 12) として売り出され、その人気の高さがうかがえるだろう。



Fig. 12: 海女館内部¹²¹⁾

以上のように、1932 (昭和 7) 年から 34 (昭和 9) 年にかけて、「海女の実演」を行う海女館は、東京から全国津々浦々の地方都市、朝鮮半島の京城市、果ては満州の大連市に至るまで、乃村泰資を筆頭に様々なランカイ屋の手によって特設された。この時期をもって、龍宮城を模した外装と内部の大水槽での「海女の実演」という海女館の形態が、各種博覧会において完全に定着していたことがわかるだろう。更には、専門的に海女館の興行を行うランカイ屋も出現し、全国の地方都市博覧会の集客装置として、海女館の「エロ」がますます助長され、宣伝されていくことになるのである。

第五章 海女館の栄枯盛衰 (1935-37 年)

1. エロ！エロ！で流石に人気を呼ぶ海女館

1935 (昭和 10) 年、基盤的な幹線道路や鉄道の敷設が完了しつつも、観光地や温泉などの観光資源を活かしきれていない観光産業都市としての熊本を紹介するため、「新興熊本大博覧会」(主催：熊本市) が開催された。それゆえ、同博覧会の観光館は、同県の観光地を紹介するという意味で、最も集客を狙った施設であったという¹²²⁾。そのため客寄せ有料余興館として、海女館は、特に人気を博すことになる。

同博覧会の開会翌日の新聞紙面では、既に、「エロ！エロ！で流石に人気を呼ぶ海女館、……みんな一齊に腰巻の曲線に見入って大垂涎！」といった、以前にも増して煽情的な惹句がイラスト入りで紙面を賑わせている¹²³⁾。そして、「水中に躍動する處女の肉體は観衆をして恍惚たる夢幻境に遊ばしめる一個の活躍であり藝術品である」とまでに称賛された結果¹²⁴⁾、「各地の博覧会で絶賛を博して来た海女実演館は今回の振興博に於ても博覧会の華として連日満員の盛況を呈して居」たという¹²⁵⁾。

更に、同博覧会の海女館の宣伝として、開会前から市中にはビラが撒かれ (前出 Fig. 11 参照)、会期中も「赤肩章の海女館の客引が会場内のあちらこちらにうろうろして」いたという¹²⁶⁾。また、同博覧会協賛会が作成した熊本観光ガイド『くまもと』にも、海女館の「概説」という名目の広告が載せられている¹²⁷⁾。なお、この広告に興行主として出てくる福原氏とは、同博覧会 2 年前の 1933 (昭和 8) 年、満州の大連で開催された満洲大博覧会における海女館の興行主・福原久義と同一人物であると考えられる。

このように、ランカイ屋に手掛けられた有料の特設余興館である海女館は、新聞紙面のみならず、それ単体の宣伝も煽情かつ盛大に行われていたことがわかるだろう。その結果、新興熊本大博覧会における海女館の入場者数は、9 万 7 千 330 人にもおよび、同博覧会有料館中で最高集客数を記録したのである¹²⁸⁾。なお、1935 (昭和 10) 年には、この新興熊本大博覧会以外にも、五つの地方都市博覧会で、海女館が特設され、既知の博覧会に関する限り、最も多くの「海女の実演」が龍宮城を模した建物の中で行われた。

呉市で開催された「国防と産業大博覧会」(主催：呉市) では、海女館は、「海女が紅の下半身と白の水着の上半身をなびかせて浮きつ沈みつ真珠採取の実演をやるといふ獵奇百パーセントのもの」と紹介され、「紅の下着は海中における猛魚の襲来を防ぐため」という誤った館内□明にも関わらず、お粗末にも取材記者がその説明に納得している¹²⁹⁾。そして、「人魚にまぎらわしい海女人神の妙技は一般大衆の人気を呼び毎日数十回に及ぶ実演であつたが、各回共に身動きならぬ盛況を見せ」たという¹³⁰⁾。また、関東大震災からの横浜復興を祝して開催された「復興記念横浜大博覧会」(主催：横浜市) でも、海女館は、「エロ氣分の薄い博覧会中唯一のエロ氣分を味はせるもの」と宣伝され¹³¹⁾、「観客数は、本博諸餘興場入場数中のトップを切り、二十四萬八千八百七十七人を算し、収入金額は二萬二千二百二十九圓二十銭に達する盛況を呈した」のである¹³²⁾。

海女館への煽情的な惹句はまだまだ続く。札幌中島公園で開催された「北海道工業振興共進会」(主催：札幌商工会議所・札幌実業組合総合会) では、水槽の中で実演を行う海女が、「純白の襦袢に真紅の腰巻姿とあつてエロ味を漂はし」¹³³⁾、三重県上野町で伊賀文化産業城の落成を記念して開催された「伊賀文化産業城落成記念全国産業博覧会」(主催：伊賀上野町) でも、「純白の水着に赤い腰巻きもなまめかしく浮きつ沈みつ真珠採取の実演と平素たしなみの横転、逆転、宙返りなど獵奇百%の水中妙技を演じてやんやの喝采を博し」たという¹³⁴⁾。更には、台湾の台北市においても、その始政 40 周年を記念し、台湾総督府の後援を受けて開催された「始政四十周年記念台湾博覧会」(主催：始政四十周年記念台湾博覧会協会) では、三重県志摩の海女が呼ばれ、「大型水槽の中で真珠をとる実演を行い、多くの台湾島民の好奇心を引き寄せ、実演時間はいつも満員であった」という¹³⁵⁾。

以上のように、1935（昭和 10）年には、台湾の台北市を含めた六ヶ所の地方都市で開催された博覧会において、海女は、水中に赤い腰巻をなびかせ、エロ味・エロ気分満載、猟奇100%の水中妙技を行う存在として、ランカイ屋に特設された余興館随一の人気を博していたのである。更に、その人気は、翌 36（昭和 11）年、翌々 37（昭和 12）年まで続いていく。

2. 鉄道と港湾による産業振興

1936（昭和 11）年、富山市では、岐阜市と富山市を結ぶ高山本線の全線開通を機に、日本海を面した満州との密接な関係を期待して産業と観光の誘致を図るとの目的から、「高山本線開通記念 日満産業大博覧会」（主催：富山市）が開催された。そして、同博覧会でも、海女の「水中乱舞」の姿が大きな写真付きで新聞紙面を飾ることになる（Fig. 13）。そこでは、「日満産業大博覧会の特設館中最もエロ、グロ的に興味を喚起してゐるのは海女館である」と紹介され、「水中に演出する裸女の乱舞こそレビュー以上に観衆の興味を呼ぶことであらう」と期待されている¹³⁶⁾。



Fig. 13: 水中に乱舞 日満博海士館に出演の海女¹³⁷⁾

この海女館もまた、「龍宮を模した外観を備へ……、硝子張りタンクを設け、板張り斜面の観覧席を設備し」¹³⁸⁾、「いれ替りたち替る観衆を恍惚たらしめ連日大入満員の大盛況であつた」という¹³⁹⁾。この海女館は「會場で最もエロチックなところから人気を呼んで」、「同館の裏手に干しておく海女達の赤い腰巻が何ものかのため盗み去らる」といった事件もあったらしい¹⁴⁰⁾。

これと同時期には、他の地方都市でも鉄道の全線開通を祝った博覧会が開催されている。「姫津線全通記念 産業振興大博覧会」（主催：津山市）は、その冠の通り、姫路市と岡山県の津山駅を結ぶ姫津線が全線開通したことを記念して開催された。姫津線開通は、岡山県内陸部と阪神の大都市とを結び、津山市の産業や観光に大きな利益をもたらすことが期待されての開催であつたという¹⁴¹⁾。ここでも「真珠採取を行ふ実況を公開する海女館」が特設されている¹⁴²⁾。更に、翌 37（昭和 12）年には、「土讃線全通記念 南国土佐大博覧会（主催：高知市）」も開催され、地元土佐市の興行主による海女館が特設されている¹⁴³⁾。このように、地方都市は、大都市と結びつく鉄道網の完備に伴って、地元の産業振興や産業誘致、観光資源の産業化を目論み、博覧会を開催し、その集客装置として海女館の「エロ」が利用され続けたのである。

また、1936（昭和 11）年には、港湾施設の拡充による地域活性化を目的にする博覧会も開催され、海女館も客寄せ余興館として特設されている。同年、博多港の築港計画第一期工事が竣工したのを記念して、博多湾海岸の新らたな埋立地で「博多築港記念大博覧会」（主催：福岡市）が開催され、海女館は「築港博中呼物の一となる」ことが期待された¹⁴⁴⁾。同海女館の興行主もまた、1933（昭和 8）年の満洲大博覧会や前年 35（昭和 10）年の新興熊本大博覧会でも触れた福原久義というランカイ屋であつた¹⁴⁵⁾。加えて、四日市港の修築が完成したことを記念して、四日市港埋立地で「国産振興四日市大博覧会」（主催：四日市市）も開催され、「人魚の如き海女の妙技は大衆の人気を呼び、毎日数十回の実演は各回満員の盛況を見せ」たという¹⁴⁶⁾。

なお、翌 1937（昭和 12）年、海女館は、先に触れた南国土佐大博覧会に加え、「名古屋汎太平洋平和博覧会」（主催：名古屋市）、「北海道大博覧会」（主催：小樽市）、「国際温泉観光大博覧会」（主催：別府市）の三つの博覧会でも特設されているが、同年夏に勃発した日中戦争を受けて、博覧会そのものが受難の時代を迎えることになる。

3. 海女館の終焉——国防と興亜の果てに

1938（昭和 13）年は、地方都市の博覧会にとって受難の年であつた。同年に予定されていた地方都市の博覧会のいくつかが中止に追い込まれ、「幻の博覧会」として記録されている¹⁴⁷⁾。その中止理由は、国民精神総動員の下に生活物資が統制下におかれ、博覧会設営用の資材が不足したこと、加えて、博覧会の娯楽的要素が戦時下ではふさわしくないと見なされ、軍や警察の横やりが入ったことにあつたことなどに因るものである¹⁴⁸⁾。この時勢下で、「エロ」を売りにした集客装置である海女館は、その新聞紙面での露出も含め、その姿を徐々に顕さなくなっていく。

このような「幻の博覧会」のうち、松江市で開催予定だった「神国大博覧会」（主催：松江市）は、当初、市制 50

周年及び陰陽連絡鉄道の全通記念として位置づけられ、「松江市観光産業博覧会」という名称で計画された地方都市博覧会であった。しかしながら、戦局激化の煽りを受けて中止が危ぶまれ、出雲神話を典拠とした「神国」を看板にした軍事色の強い名称に変更して開催を試みるものの、最終的には中止の憂き目を見ることになる。その博覧会にも、海女館の特設が予定されていた¹⁴⁹⁾。

このように地方都市の博覧会開催が難しくなった時勢下でも、大東亜共栄圏確立や国防意識の高揚が重要視され、「興亜」や「国防」などの名を冠に頂く博覧会は続いたが、海女館もまた、その「エロ味」を後景化する形で細々と続けられていた。

1941(昭和16)年に高田市で開催された「興亜国防大博覧会」(主催:高田市観光協会)では、海女の実演が「人魚にまぎらわしい海女神人の妙技は恍惚たらしむるものがあり、……一般大衆を魅了して非常な人気を呼び毎日身動きならぬ盛況を見せた」という¹⁵⁰⁾。なお、同博覧会は、物資統制下で資材不足のため、「釘の配給、廃材の利用という苦労が連続した会場づくりであった」¹⁵¹⁾。また、陸海軍省の後援を受けて「世界状況や興亜聖戦を巡る前戦の武勳や戦時銃後の心構へを□調し時局を十分加味し」ながらも¹⁵²⁾、大秋田市合併を記念して秋田市の産業振興を謳った「大東亜建設博覧会」(主催:大秋田産業振興会)でも、海女館が特設されている。

更には、地方都市主催の博覧会開催が難しくなった代わりに、新聞社を主催としたメディア・イベントとしての博覧会も細々と続いていた。1939(昭和14)年には、「軍事思想普及の目的をもつて」高松市で開催された「興亜博覧会」(主催:合同新聞社)に海女館が登場している¹⁵³⁾。そして、1941(昭和16)年、山形県酒田市中で開催された「酒田興亜国防大博覧会」(主催:山形新聞社)でも海女館(Fig. 14)が特設され、これが昭和戦前期における博覧会最後の「海女の実演」となったのである。



Fig. 14: 山形新聞主催興亜大博覧会 即売館・海女館¹⁵⁴⁾

おわりに

本稿では、これまで時系列に沿って、大正・昭和戦前期における博覧会の意味、その中での海女館の位置付け、並びに、それを宣伝する新聞メディア(地方紙)の言説を通して、海女に対する性的視線の形成過程について考察を行ってきた。

博覧会は、日本で開催された当初、生産振興策のための催しとして位置づけられ、見世物性や娯楽性が極力排除されていたが、20世紀以降は、消費奨励策へと方向転換し、むしろ積極的に見世物的要素を博覧会に取り入れていく動きが現れた。そして、1920年代(大正・昭和初期)には、地域振興策を伴って、その傾向が顕著となり、博覧会は大衆娯楽に変貌していったのである。

その過程において、本稿で取り扱った海女館は、まさに集客装置たる見世物として博覧会に取り入れられ、その集客性を補強するような形で、海女は、「奇妙なもの」や「エロな存在」として商品化されていくことになる。しかも、そのような海女に対する性的視線は、多くの客を呼び込もうとする地方行政や新聞メディアも含めた博覧会主催・協賛者、その集客から利益を上げようとするランカイ屋、さらには、新聞メディアの扇動に乗りつつ見世物を楽しもうとする観客、それぞれの利害が絡み合う形で形成されていったのである。

そして、この過程は、海女という生身の人間を「他者」として展示し、それを鑑賞するという、大衆が圧倒的な優位的立場に置かれた非対称的な関係の構築過程をも意味しているのである。

注

- 1) 三重県鳥羽市(2018)。
- 2) 小暮(2009)、小暮(2015)、菊池(2009)を参照のこと。なお、塚本(2012)は、都市部大衆の海女への視線を、その潜水技術への憧憬として捉え、『性的視線』という観点から論じられてきた従来の偏った見解(15頁)を修正せんと試みている。しかしながら、本稿で詳述するように、「海女の実演」は、大衆の好奇・好色の視線に晒されていただけでなく、特に新聞メディアによって、そのような性的宣伝もなされていたことがわかるだろう。
- 3) 本稿で使用する「国内」とは、大正・昭和戦前期における日本国領土、すなわち、朝鮮半島や台湾、更に実質的に統治下にあった満州国を含むこととする。
- 4) 本稿末の資料を参照のこと。なお、この一覧表は、橋爪監修(2005)の巻末資料「日本の博覧会年表」(229-235頁)を基に、各種博覧会資料や新聞データベースによる博覧会検索、塚本(2012)の「博覧会における『海女』一覧表」(24頁)、小暮編(2014)のパンフレット類や同編(2013)の海女関連絵葉書に基づいて独自に作成したものである。よって、同橋

- 爪監修「博覧会年表」に記載されていない博覧会・共進会についても一覧化されている。なお、各種博覧会資料の調査に関して、株式会社乃村工藝社情報資料室には、大変にお世話になった。ここに記して感謝の気持ちとしたい。
- 5) 特に、本稿でも引用されている吉見(1992)、並びに、國(2010)を参照のこと。
 - 6) 地方博覧会全般に関しては、山路(2017)、個別地方博覧会については、特に本稿でも引用されている長谷川(2009)や村上(2014)など、少なからずの論考がある。
 - 7) ここでの「博覧会の異文化機能」とは、朝鮮館や台湾館、アイヌ館などの植民地館の展示を示す。このような博物館における帝国主義的・植民地主義的な視線に基づく「他者」の表象については、特に、松田(2003)を参照のこと。
 - 8) 前掲、吉見(1992)、24頁。
 - 9) 同上、146-152頁。
 - 10) 前掲、國(2010)、157頁。
 - 11) 例えば、博覧会の定番施設である西洋サーカスに日本の見世物芸の系譜を見出した阿久根(1977)の研究や、都市論からの視点で「お化け屋敷」を考察した橋爪(1994)などが挙げられる。
 - 12) 前掲、塚本(2012)。
 - 13) 宮本(1978)、155頁。
 - 14) 前掲の塚本(2012)によれば、博覧会における「海女の実演」の初発は、1916(大正5)年に東京上野公園で開催された「海事水産博覧会」(主催：帝国海事協会・大日本水産会)だとされているが、同博覧会で海女の「実演」は行われていない。実際には、海事水産博覧会編(1916)によれば、「海底ノ状態ヲ油繪具ヲ以テ描寫シ淺海ニテハ鮑採集ノ状況ヲ示シ」(65頁)たもの、すなわち、海女の姿を描いた絵画が展示されていたのである。また、同博覧会の2年後、1918(大正7)年に北海道札幌・小樽で開催された「開道五十年記念北海道博覧会」(主催：北海道農友会)でも同様に、「海女の介草採取の状態を油絵として掲げ」ている(『河北新報』1918年8月9日、3面)。
 - 15) 大槻編(1937)、291頁。
 - 16) 『京都日出新聞』1920年5月20日、3面。
 - 17) 川添・木下・橋爪編(2003)、37頁より転載。
 - 18) 『大阪朝日新聞』1897年1月1日、15面。
 - 19) 遠藤編(1988)、15頁。
 - 20) 小出(1987)、69頁。
 - 21) 『東京朝日新聞』1901年6月9日、朝刊4面。
 - 22) 前掲、小出(1987)、71頁より転載。
 - 23) 内田(2014)、20-26頁。
 - 24) 歴史写真会(1922)、30頁。
 - 25) 同上。
 - 26) 同上より転載。
 - 27) 『東京朝日新聞』1922年6月20日、夕刊2面。
 - 28) 同上より転載。
 - 29) 東京府編(1924)、101頁。
 - 30) 前掲、吉見(1992)、146-147頁。なお、この第五回内国勸業博覧会の会場跡地(2万6千坪)は、鉄道系の民間企業に払い下げられ、大阪随一の盛り場・千日前に代わる娯楽センターとして開発されていく。1912年(明治45)年1月の「ミナミの大火」で、海女の見世物も出されていた千日前が焼野原となり、同年7月、同会場跡地に「新世界」が誕生することになる(同148頁)。
 - 31) 前掲、國(2010)、184頁。
 - 32) 前掲、吉見(1992)、151頁。
 - 33) 前掲、橋爪監修(2005)によれば、博覧会に海女館が初めて登場したのは、1930(昭和5)年に東京上野公園・横須賀で開催された「日本海海戦二十五周年記念海と空の博覧会」(主催：日本産業協会・三笠保存会)だとされている。しかし、同博覧会報告書(三笠保存会、1930)には「海女館」に関する記載が見当たらない。また、乃村工藝社社史編纂室編(1993)では、1928(昭和3)年に宮城県塩釜で開催された「塩釜港海の博覧会」(主催：宮城県塩釜町)だとされているが(30頁)、その名称は「海底館」である(『河北新報』1928年4月16日、朝刊3面)。どちらにしても、海女館は、市制十周年記念大連勸業博覧会において先に登場している。
 - 34) 大連市編(1926)、5頁。
 - 35) 山路(2008)、171頁。
 - 36) 竹村(2008)、97頁。
 - 37) 『満洲日日新聞』1925年8月10日、朝刊7面。
 - 38) 前掲、大連市編(1926)、240頁。
 - 39) 『満洲日日新聞』1925年9月5日、朝刊3面。
 - 40) 前掲、大連市編(1926)、182頁。ちなみに、この長谷川良之助は、『支那國民性の解剖——附日本と支那』(1923)の著者(大連職業紹介所主)と同姓同名の人物ではあるが、現時点では同一人物か否か未確認のままである。ただし、職業紹介所主が、香具師の親方をも意味しているのであれば、見世物興行主として海女館を経営していても納得できるだろう。
 - 41) 『河北新報』1928年4月16日、朝刊3面。
 - 42) 『河北新報』1928年4月25日、朝刊4面。
 - 43) 中川(1969)、194頁。なお、これまで見てきたように、これは事実と異なる認識である。
 - 44) 同上、195頁。
 - 45) 同上。
 - 46) 『讀賣新聞』1928年7月17日、朝刊7面。
 - 47) 前掲、小暮編(2013)。
 - 48) 『東京朝日新聞』1928年7月30日、朝刊5面。
 - 49) 吉見(1996)、4頁。吉見は、メディア・イベントについて、1)メディアが主催するイベント、2)メディアに媒介されるイベント、3)メディアによってイベント化される現実、の三層に分けて論考を展開しているが(26頁)、本稿では、博覧会における大衆の欲望の動員のみに焦点を合わせ、主に1)についてメディア・イベントという言葉を用いることとする。
 - 50) 同上、6頁。
 - 51) 山本(1996)、47頁。

- 52) 高木 (1963)。この大納涼園は正力の見込み通り大変な人気で、入場益が上がったのみならず、讀賣新聞の部数も2万部伸びたという (372 頁)。
- 53) 橋爪 (1996)、178 頁。
- 54) 橋本 (1975)、23 頁。
- 55) 前掲、橋爪 (1996)、178-179 頁。ただし、この二つの後援イベントにおける乃村泰資の関わりは明らかではない。
- 56) 竹村 (1996)、134 頁。
- 57) 『伊勢新聞』1930 年 2 月 7 日、朝刊 2 面。
- 58) 『伊勢新聞』1930 年 3 月 5 日、朝刊 3 面。
- 59) 『伊勢新聞』1930 年 3 月 25 日、朝刊 2 面。
- 60) 『伊勢新聞』1930 年 4 月 11 日、朝刊 2 面。
- 61) 『伊勢新聞』1930 年 4 月 17 日、朝刊 2 面。
- 62) 『伊勢新聞』1930 年 5 月 4 日、朝刊 3 面。
- 63) 前掲、中川 (1969)、195 頁。
- 64) 同上、196 頁。
- 65) 同上、197-200 頁。
- 66) 神戸博覧会協会編 (1931)、254 頁。
- 67) 『大阪朝日新聞』1930 年 9 月 28 日、朝刊 12 面。
- 68) 前掲、村上 (2014)、41 頁。
- 69) 林 (1981)。なお、「衛生展覧会」とは、田中 (1994) によれば、衛生に関する知識の啓蒙・普及を目的とした展示を行う小規模な催し物である (12 頁)。同催しは「衛生博覧会」とも混同されているが、その規模と目的から、本稿での「博覧会」には含んでいない。
- 70) 前掲、林 (1981)、144 頁。
- 71) 同上。
- 72) 前掲、山路 (2017)、121 頁。
- 73) 前掲、橋爪監修 (2005)、127 頁。
- 74) 『東京朝日新聞』1931 年 3 月 13 日、朝刊 11 面。
- 75) 『北海タイムス』1931 年 7 月 2 日、朝刊 8 面。
- 76) 水出編 (1932)。中綴じ「水族館及ピ本館圖」より転載。
- 77) 同上、295 頁。
- 78) 同上、中綴じ写真より転載。なお、同博覧会で雇われた写真の海女たちは、山本あさ (21 歳)、太田とく (21 歳)、濱口ふみ (21 歳)、堀口まさの (20 歳)、太田きその (19 歳)、岩城きく (18 歳) の 6 名 (順不同) で、18 歳から 21 歳までの若い海女が雇われている。
- 79) 『北海タイムス』1931 年 7 月 9 日、朝刊 8 面。
- 80) 『北海タイムス』1931 年 7 月 11 日、朝刊 4 面。
- 81) 前掲、水出編 (1932)、295-296 頁。
- 82) 前掲、橋爪監修 (2005)、127 頁。
- 83) 『北海タイムス』1931 年 7 月 7 日、朝刊 7 面。なお、同記事によれば、雇われた海女は、三重県志摩郡船越村の宮本ひさ (22)、小林かつ (21)、小林せん (47)、同郡片田村の岡本みつ (20) と岡本とし (19)、計 5 名。
- 84) 『京城日報』1932 年 7 月 17 日、朝刊 3 面。
- 85) 『京城日報』1932 年 7 月 20 日、夕刊 1 面。
- 86) 『京城日報』1932 年 7 月 22 日、朝刊 7 面。
- 87) 同上より転載。
- 88) 『京城日報』1932 年 7 月 21 日、朝刊 9 面。
- 89) 『京城日報』1932 年 7 月 28 日、朝刊 2 面。
- 90) 函館市中央図書館デジタル資料館「新興満蒙博覧会 海女館 (pc100021-0001)」より転載。
<http://archives.c.fun.ac.jp/fronts/detail/postcards/4f5223d3ea8e8a0b70003a4c> (2021 年 12 月 1 日)
- 91) 乃村工藝社 (1975)、33 頁。
- 92) 前掲、山路 (2017)、114 頁。
- 93) 同上、179 頁。
- 94) 同上、216 頁。
- 95) 同上、219 頁。
- 96) 金沢市役所編 (1934)、276 頁。
- 97) 宮崎市役所・宮崎商工会議所 (1934)、52 頁。
- 98) 『宮崎新聞』1933 年 3 月 6 日、朝刊 5 面。
- 99) 『宮崎新聞』1933 年 3 月 17 日、朝刊 9 面。
- 100) 『宮崎新聞』1933 年 3 月 23 日、朝刊 7 面。
- 101) 前掲、橋爪監修 (2005)、130 頁。
- 102) 『宮崎新聞』1933 年 3 月 22 日、朝刊 3 面。
- 103) 『宮崎新聞』1933 年 4 月 2 日、朝刊 7 面。
- 104) 『宮崎新聞』1933 年 5 月 2 日、朝刊 7 面。
- 105) 前掲、長谷川 (2009)、187 頁。
- 106) 『大阪朝日新聞 (奈良版)』1933 年 3 月 19 日朝刊 5 面。
- 107) 『河北新報』1933 年 4 月 13 日、夕刊 2 面。
- 108) 『河北新報』1933 年 4 月 10 日、朝刊 7 面。
- 109) 『河北新報』1933 年 5 月 21 日、朝刊 7 面。
- 110) 前掲、乃村工藝社 (1975)、33 頁。
- 111) 前掲、小暮編 (2014) より。なお、このチラシは、現在のところ、どの博覧会で撒かれたものか分かっていないが、この類のチラシの一例として挙げておく。ただし、このチラシ紙面で、「海女館」や「海女実演館」ではなく、「海女作業実演館」という言葉が使われているは、新興熊本大博覧会 (1935 年) と南国土佐大博覧会 (1937 年) の海女館に関してのみである。
- 112) 大連市編 (1934)、343 頁。
- 113) 前掲、橋爪監修 (2005)、134 頁。
- 114) 『長崎日日新聞』1934 年 3 月 25 日、朝刊 1 面。
- 115) 『長崎日日新聞』1934 年 5 月 15 日、朝刊 3 面。
- 116) 『山陽新報』1934 年 3 月 25 日、朝刊 4 面。
- 117) 『山陽新報』1934 年 4 月 20 日、朝刊 4 面。
- 118) 国産振興家庭博覧会編 (1934)、160 頁。
- 119) 前掲、乃村工藝社 (1975)、47 頁。
- 120) 『山形新聞』1934 年 10 月 10 日、朝刊 1 面。
- 121) 前掲、小暮編 (2013) より。
- 122) 熊倉 (2016)、152-153 頁。
- 123) 『九州新聞』1935 年 3 月 26 日、朝刊 5 面。
- 124) 同上。
- 125) 『九州新聞』1935 年 4 月 12 日、朝刊 5 面。
- 126) 田中 (1936)、413-414 頁。

- 127) 新興熊本大博覧會協賛會編（1935）、82 頁。
- 128) 熊本市編（1936）、625 頁。
- 129) 『大阪朝日新聞（広島版）』1935 年 4 月 6 日、朝刊 5 面。
- 130) 呉市編（1936）、552 頁。
- 131) 実業之横浜社編（1935）、22 頁。
- 132) 復興記念横浜大博覧会編（1936）、475 頁。
- 133) 『北海タイムス』1935 年 8 月 1 日、朝刊 8 面。
- 134) 三重県上野町編（1938）、143 頁。
- 135) 林（2012）、646 頁。
- 136) 『越中新聞』1936 年 4 月 11 日、2 面。
- 137) 同上より転載。
- 138) 富山市役所（1937）、186 頁。
- 139) 同上、588 頁。
- 140) 『越中新聞』1936 年 5 月 4 日、2 面。
- 141) 大平（2016）、39-40 頁。
- 142) 津山市産業振興大博覧会編（1939）、154 頁。
- 143) 南国土佐大博覧会編（1940）、339 頁。
- 144) 『福岡日日新聞』1936 年 3 月 17 日、朝刊 7 面。
- 145) 博多築港記念大博覧会協賛会編（1937）、109 頁。
- 146) 四日市市役所編（1937）、360 頁。
- 147) 前掲、山路（2017）、249 頁。
- 148) 同上、311 頁。
- 149) 同上、326-330 頁。
- 150) 高田商工会議所編（1941）、179-180 頁。
- 151) 前掲、橋爪監修（2005）、174 頁。
- 152) 『秋田魁新報』1941 年 4 月 24 日、朝刊 3 面。
- 153) 『合同新聞』1939 年 6 月 7 日、朝刊 2 面。
- 154) 前掲、小暮編（2013）より。

参考文献

- 阿久根巖（1977）『サーカスの歴史——見世物小屋から近代サーカスへ』西田書店。
- 内田青蔵（2014）『「間取り」で楽しむ住宅読本』光文社。
- 遠藤章弘編（1988）『明治期・大衆娯楽の中心——千日前界限』上方おもしろ草紙』朋興社。
- 大槻喬編（1937）『京都博覧協会史略』京都博覧協会。
- 大平奈緒子（2016）『産業振興と鉄道』高橋千晶・前川志織編『博覧会絵はがきとその時代』青弓社、21-46 頁。
- 海事水産博覧会編（1916）『海事水産博覧会報告』海事水産博覧会。
- 金沢市役所編（1934）『金沢市主催 産業と観光の大博覧会誌』金沢市役所。
- 川添裕・木下直之・橋爪紳也編（2003）『見世物はおもしろい（別冊太陽 123）』平凡社。
- 菊池暁（2009）『誰がために海女は濡れる——日本海女写真史略』川村邦光編『セクシュアリティの表象と身体』臨川書店、114-141 頁。
- 國雄行（2010）『博覧会と明治の日本』吉川弘文館。
- 熊倉一紗（2016）『観光と地域振興』高橋千晶・前川志織編『博覧

- 会絵はがきとその時代』青弓社、138-159 頁。
- 熊本市編（1936）『新興熊本大博覧會誌』熊本市。
- 呉市編（1936）『呉市主催国防と産業大博覧会誌』呉市。
- 小出檜重（1987）『足の裏』芳賀徹編『小出檜重随筆集』岩波書店、68-73 頁。
- 神戸博覧会協会編（1931）『観艦式記念 海港博覧会誌』神戸博覧会協会。
- 国産振興家庭博覧会編（1934）『倉敷市国産振興家庭博覧会誌』国産振興家庭博覧会。
- 小暮修三（2009）『海女の表象——『ナショナル ジオグラフィック』に見るオリエンタリズムと観光海女の相互関係』『日本研究』第 39 集、119-139 頁。
- 小暮修三（2015）『海女の観光商品化を巡る諸問題——千葉県御宿における〈観光海女〉の事例から』『海洋人間学雑誌』第 3 巻特別号、25-35 頁。
- 小暮修三編（2013）『海女絵葉書集（v.1: 戦前篇）』東京海洋大学附属図書館。
- 小暮修三編（2014）『海女パンフレット集』東京海洋大学附属図書館。
- 実業之横浜社編（1935）『復興博各館一巡り』『大横濱——昭和十年復興博記念號其二』第 32 巻 4 号、実業之横浜社。
- 新興熊本大博覧會協賛會編（1935）『くまもと』新興熊本大博覧會協賛會。
- 大連市編（1926）『大連勸業博覧会誌』大連勸業博覧会協賛會。
- 大連市編（1934）『大連市主催満洲大博覧会誌』大連市。
- 高木教典（1963）『正力松太郎』日高六郎編『マスメディアの先駆者（20 世紀を動かした人々15）』講談社、343-424 頁。
- 高田商工会議所編（1941）『高田市興亜国防大博覧会誌』高田商工会議所。
- 竹村民郎（1996）『笑楽の系譜——都市と余暇文化』同文館。
- 竹村民郎（2008）『一九二五年中国東北部（旧満州）で開催された大連勸業博覧会の歴史的考察——視聴化された満蒙』『日本研究』第 38 集、81-119 頁。
- 田中聡（1994）『衛生展覧会の欲望』青弓社。
- 田中辰二（1936）『新興熊本大博覧會縦横記』熊本市編『新興熊本大博覧會誌』熊本市、413-414 頁。
- 塚本明（2012）『都びとのあこがれ——歴史に見る志摩の『観光海女』』『三重大史学』第 12 号、15-39 頁。
- 津山市産業振興大博覧会編（1939）『津山市主催姫津線全通記念産業振興大博覧会並ニ協賛会誌』津山市産業振興大博覧会。
- 東京府編（1924）『平和記念東京博覧会事務報告 上巻』東京府。
- 富山市役所（1937）『富山市主催日満産業大博覧会誌』富山市役所。
- 中川童二（1969）『ランカイ屋一代——わが博覧会 100 年史』講談社。
- 南国土佐大博覧会編（1940）『南国土佐大博覧会誌——土讃線開通記念』南国土佐大博覧会。
- 乃村工藝社社史編纂室編（1975）『70 万時間の旅Ⅱ』乃村工藝社。
- 乃村工藝社社史編纂室編（1993）『ディスプレイ 100 年の旅——乃村工藝社 100 年史』乃村工藝社。

博多築港記念大博覧会協賛会編（1937）『博多築港記念大博覧会誌』博多築港記念大博覧会協賛社。

橋爪紳也（1994）『化物屋敷——遊戯化される恐怖』中央公論社

橋爪紳也（1996）「年中行事と新聞事業——両国国技館の納涼イベントをめぐって」津金澤聡廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館出版、169-191 頁。

橋爪紳也監修（2005）『日本の博覧会——寺下勅コレクション（別冊太陽 133）』平凡社。

橋本道淳（1975）「正力松太郎社長と乃村泰資氏」乃村工藝社社史編纂室編『70 万時間の旅Ⅱ』乃村工藝社、23 頁。

長谷川司（2009）「戦前地方博覧会における地域イメージの構築——祖国日向産業博覧会（1933）のケーススタディ」『総合政策研究』第 31 号、関西学院大学、183-196 頁。

長谷川良之助（1923）『支那國民性の解剖——附日本と支那』大阪屋號書店。

林喜芳（1981）『わいらの新開地』冬鵲房。

復興記念横浜大博覧会編（1936）『復興記念横浜大博覧会誌』復興記念横浜大博覧会。

萬國婦人子供博覧會事務所編（1935）『萬國婦人子供博覧會報告』萬國婦人子供博覧會事務所。

松田京子（2003）『帝国の視線——博覧会と異文化表象』吉川弘文館。

三重県上野町編（1938）『伊賀文化産業城落成記念全国博覧会誌』三重県上野町。

三重県鳥羽市（2018）「海女文化を活かした活性化構想計画」三重

県鳥羽市。

三笠保存会（1930）『日本海々戦二十五周年記念 海と空の博覧會報告』三笠保存会。

水出良造編（1932）『小樽海港博覧会誌』小樽商工会議所。

宮崎市役所・宮崎商工会議所（1934）『祖国日向産業博覧会並協賛会誌』宮崎市役所・宮崎商工会議所。

宮本常一（1978）「海人ものがたり」中村由信編『日本の海女』マリン企画、135-156 頁。

村上しほり（2014）「近現代神戸の観光空間——1920-1950 年代の湊川新開地の変遷に着目して」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 7 巻第 2 号、39-48 頁。

山路勝彦（2008）『近代日本の植民地博覧会』風響社。

山路勝彦（2017）『地方都市の覚醒——大正昭和戦前史 博覧会篇』関西学院大学出版会。

山本武利（1996）「草創期のメディア・イベント」津金澤聡廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館出版、31-59 頁。

吉見俊哉（1992）『博覧会の政治学——まなざしの近代』中央公論社。

吉見俊哉（1996）「メディア・イベント概念の諸相」津金澤聡廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館出版、3-30 頁。

四日市市役所編（1937）『国産振興四日市大博覧会』四日市市役所

林恵玉（2012）「日本統治下台湾博覧会とその宣伝活動」『中央大学経済研究所年報』第 43 号、597-648 頁。

歴史写真会（1922）「平和博が人氣振興策としての水底眞珠採り實況 志州鳥羽より六名の海女を呼寄せて」『歴史写真』7 月号。

資料：大正・昭和戦前期「海女の実演」博覧会一覧

博覧会名	会期	開催都市
全国勸業博覧会	1920（大正 9）年 3 月 20 日～5 月 20 日	京都市
平和記念 東京博覧会	1922（大正 11）年 3 月 10 日～7 月 31 日	東京都
市制十周年記念 大連勸業博覧会	1925（大正 14）年 8 月 10 日～9 月 18 日	満州大連市
海の博覧会	1928（昭和 3）年 4 月 15 日～6 月 3 日	宮城県塩釜市
御慶事記念 婦人子供博覧会	1928（昭和 3）年 7 月 1 日～8 月 31 日	東京都
二見ヶ浦臨海博覧会	1930（昭和 5）年 4 月 15 日～6 月 25 日	三重県二見町
観艦式記念 海港博覧会〔神戸海港博覧会〕	1930（昭和 5）年 9 月 20 日～10 月 31 日	兵庫県神戸市
浜松市主催 全国産業博覧会	1931（昭和 6）年 3 月 15 日～5 月 8 日	静岡県浜松市
小樽海港博覧会	1931（昭和 6）年 7 月 11 日～8 月 20 日	北海道小樽市
国産振興 北海道拓殖博覧会	1931（昭和 6）年 7 月 12 日～8 月 20 日	北海道札幌市
金沢市主催 産業と観光の大博覧会	1932（昭和 7）年 4 月 12 日～6 月 5 日	石川県金沢市
新興満蒙博覧会	1932（昭和 7）年 7 月 21 日～9 月 18 日	朝鮮京城府
満蒙軍事博覧会	1932（昭和 7）年 9 月 15 日～11 月 10 日	愛知県名古屋
萬國婦人子供博覧会	1933（昭和 8）年 3 月 17 日～5 月 10 日	東京都
祖国日向産業博覧会	1933（昭和 8）年 3 月 17 日～4 月 30 日	宮崎県宮崎市
奈良市制 35 周年記念 観光産業博覧会	1933（昭和 8）年 3 月 20 日～5 月 21 日	奈良県奈良市
第二師団凱旋記念 満蒙軍事博覧会	1933（昭和 8）年 4 月 9 日～5 月 28 日	宮城県仙台市
満洲大博覧会	1933（昭和 8）年 7 月 23 日～8 月 31 日	満州大連市
全国工芸博覧会	1934（昭和 9）年 3 月 25 日～5 月 8 日	岡山県岡山市
国際産業観光博覧会	1934（昭和 9）年 3 月 25 日～5 月 23 日	長崎県長崎市
国産振興家庭博覧会	1934（昭和 9）年 4 月 22 日～5 月 16 日	岡山県倉敷市
国防と教育博覧会	1934（昭和 9）年 7 月 10 日～8 月 30 日	新潟県新潟市
国防と産業博覧会	1934（昭和 9）年 10 月 10 日～11 月 5 日	山形県山形市
新興熊本大博覧会	1935（昭和 10）年 3 月 25 日～5 月 13 日	熊本県熊本市
復興記念 横浜大博覧会	1935（昭和 10）年 3 月 26 日～5 月 24 日	神奈川県横浜市
呉市主催 国防と産業大博覧会	1935（昭和 10）年 3 月 27 日～5 月 10 日	広島県呉市
北海道工業振興共進会	1935（昭和 10）年 7 月 18 日～8 月 21 日	北海道札幌市
始政四十周年記念 台湾博覧会	1935（昭和 10）年 10 月 10 日～11 月 28 日	台湾台北市
伊賀文化産業城落成記念 全国産業博覧会	1935（昭和 10）年 10 月 12 日～11 月 10 日	三重県伊賀上野町
国産振興 四日市大博覧会	1936（昭和 11）年 3 月 25 日～5 月 13 日	三重県四日市市
博多築港記念大博覧会	1936（昭和 11）年 3 月 25 日～5 月 13 日	福岡県福岡市
姫津線全通記念 産業振興大博覧会	1936（昭和 11）年 3 月 26 日～5 月 5 日	岡山県津山市
高山本線開通記念 日満産業大博覧会	1936（昭和 11）年 4 月 15 日～6 月 8 日	富山県富山市
名古屋汎太平洋平和博覧会	1937（昭和 12）年 3 月 15 日～5 月 31 日	愛知県名古屋
土讃線全通記念 南国土佐大博覧会	1937（昭和 12）年 3 月 22 日～5 月 5 日	高知県土佐市
北海道大博覧会	1937（昭和 12）年 7 月 7 日～8 月 25 日	北海道小樽市
国際温泉観光大博覧会	1937（昭和 12）年 3 月 25 日～5 月 13 日	大分県別府市
興亜博覧会	1939（昭和 14）年 5 月 2 日～6 月 11 日	香川県高松市
高田市 興亜国防大博覧会	1941（昭和 16）年 4 月 10 日～5 月 10 日	新潟県高田市
大秋田市合併記念 大東亜建設博覧会	1941（昭和 16）年 5 月 15 日～6 月 30 日	秋田県秋田市
酒田興亜国防大博覧会	1941（昭和 16）年 7 月 25 日～8 月 28 日	山形県酒田市

見世物としての海女——博覧会における「海女館」の機能

小暮修三*

(* 東京海洋大学学術研究院海洋政策文化学部門)

大正・昭和戦前期の国内博覧会では、その余興として「海女の実演」が行われ、非常に人気を博したという。現在確認し得る限り、1920年から1940年代初頭までの間に、すなわち、大正・昭和戦前期に、博覧会で行われた「海女の実演」が41件確認されている。

ところで、そのような海女は、どのような視線に晒され、どのように消費されていったのか？そして、なぜ、大衆の人気を博していたのか？本稿では、時系列に則って、博覧会の意味、そこにおける海女館の位置付け、並びに、それを宣伝する新聞メディア（特に、博覧会開催地の地方新聞）の言説を通して、海女に対する性的視線の形成過程について考察を行った。

同時期における国内博覧会の海女館では、大衆の海女に対する性的視線が、博覧会の集客を望む主催者、ランカイ屋（イベント業者）、新聞メディア、それぞれの利害が絡み合う形で形成されていった。そこでの海女は、「奇妙」や「エロ」といった形容詞を伴って商品化されていくことになる。このことは、海女という生身の人間を「他者」として展示し、それを金銭と代替に鑑賞するという、大衆が圧倒的な優位的立場に置かれた非対称的な関係の構築過程を表している。

キーワード： 海女、見世物、博覧会、メディア、表象